

もり・もり探検隊

■ 事業のねらい

フィールドワークやワークショップをとおして、地域の豊かな歴史や伝統、文化などを学習しながら、先人の生き方や知恵などについて理解を深める。



- 実施日 平成24年7月14日(土)～16日(月・祝) 2泊3日
- 参加対象 小学5年生～中学3年生20名
- 参加実績 参加者：8名
 小5＝3名、小6＝2名、
 中1＝2名、中2＝1名
 男子＝6名、女子＝2名
 運営協力者：学生ボランティア1名
- 備考 講師：毛利 剛 (大野文化財保護研究会)
 活動場所：森町・七飯町・函館市

1 事業実施の背景

ふるさと教育を充実させるために、我が国及び北海道、そして自分が生まれ育った地域を知り、理解を深め、郷土に対する愛着や誇りを持ち、国際社会においてよりよく生きようとする覚を一層深めていくことが大切である。(北海道教育推進計画)
 道南圏域は道内で唯一、戊辰戦争最後の舞台となっており、幕末の志士たちが熱い思いを抱いて、近代日本を拓こうとした歴史的に有名な地域である。
 この事業では、旧幕府軍が箱館戦争で五稜郭に進攻した道(約46km)をたどるロングウォークを通して、先人の「思いをとげるための情熱」や「ものの考え方」に迫らせ、よりよい生き方について考えるきっかけとすることを目的とした。

2 プログラムデザイン

受付7月14日(土)10:00 解散7月16日(月・祝)13:30(函館市中央図書館)/14:30(ネイバル森)

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
14 土						開 会 式	オリ エン (棒 パン)	交 流 食 食	バ ス 移 動	ロングウォーク ●森町・鷲ノ木～ネイバル森 (約17km)					夕 食	入 浴	歴 史 講 話	ふ り か え り	就 寝
15 日		起 床	朝 食				ロングウォーク ●ネイバル森～函館市「花の湯」(約23km) ※峠下小学校で昼食休憩(弁当)							夕 食	ふ り か え り	入 浴	就 寝		
16 月・祝		起 床	朝 食	部 屋 点 検		ロングウォーク ●函館市「花の湯」 ～五稜郭 (約6km)		ふ り か え り	昼 食 (弁 当)	閉 会 式									

■ アクティビティについて



■ 意図

- ロングウォークでは、リアルな追体験ができるよう、当時の人が実際に使用した未整備の旧道を含めたルート設定を行った。
- 話をせず黙々と歩くソロウォークをさせる区間を設定するなど、先人の情熱に思いを巡らせるような活動時間の工夫をした。
- プログラム全体を通して、「自分のがんばり発見」「仲間の良さ発見」「歴史を発見」の3つの視点を意識させながら、日々の活動に取り組みさせた。
- 每晚1時間程度ふりかえりの時間を設定し、3つの視点について自分の成長と課題を確認し、翌日の具体目標を設定しながら活動を進めた。

■ 留意事項

- 事業イメージと行程の厳しさのギャップが生じないように、1日の移動距離や、ヤブこぎ等の難所が含まれることを開催要項に明示し、事前周知した。
- 熱射病対策で冷却材やスポーツドリンクを準備したり、歩行している位置が通行車両から目立つように旗を活用したりするなど、安全に配慮した。
- 市町をまたぐ広域で活動を展開することから、近隣の休日当番医を含めた救急対応について事前確認するなど、危機管理に万全を期した。

3 活動の様子



4 事業評価



5 まとめ



■ 当日の様子

初日、オリエンテーションの中で、職員が榎本武揚にふんし、箱館戦争の概略(どのような経緯で、今回参加者がたどるルートを進攻することになったのか)について解説を行った。その後、自己紹介をしながら、少し早目の交流昼食をとった。午後1時過ぎ、榎本武揚ら旧幕府軍が上陸した鷲ノ木を出発した。「もり・もり探検隊」の旗を掲げ、旧国道五号線に沿って17kmを歩いた。駒ヶ岳を左に見ながら、暑さにも負けず、ネイバル森に到着した。夜は講師の毛利さんが「鷲ノ木から当時2,000人とも言われた人が、武器や食料を持ってどのようにして歩いて行ったか」について説明した。参加者は、重い荷物を背に、歩いた人々の苦勞に思いを巡らせた。

2日目はネイバル森を出発し、23km先の目的地、函館を目指した。当時の人々が歩いたであろう旧道の山道を峠下地区の一戦をまみえた地まで歩いた。ヤブが背丈まで茂る悪路でも、仲間同士で歌を歌いながら、順調に休憩地点まで到着した。午後からは、函館に向けて再出発した。講師の案内で、山の中にある塹壕(箱館戦争の遺構)の見学も行った。熱い太陽の陽ざしに、やや疲れ顔が見られたが、それでも弱音を吐くことなく、一人も遅れることなく目的地の温泉施設に到着した。風呂に入り、その日の疲れを癒した。

最終日は、朝から雨が降る中、最終目的地となる五稜郭を目指して、ロングウォークを実施した。途中、当時の状況を想像し自己対話を促すため、話をせず黙々と歩くソロウォークの体験も実施した。その後、全員そろって五稜郭『函館奉行所』に到着後、46km踏破の検討を互いにたたえあった。

■ 参加者の声

- 昔の人は、30cmもの積雪の中で、銃や大砲、食料などがかついで峠越えをしていたと知って、すごいと思った。
- 昔の人の体力もすごいけど、敵のけが人を助けるという勇気もすごいと思った。
- 2泊3日たくさん歩いて、草があつたり雨が降ったりして、自分たちはとっても大変だったのに、昔の人はしゃべらず歩き続けてすごいと思った。
- 最終日の前半は、全くしゃべらなくても大丈夫だったけど、後半は友達と励ましあいながら歩くことで、やる気が出るのが分かった。

■ 評価方法・重点

「IKR調査」を実施。「視野・判断」「自己規制」に重点をおいた。

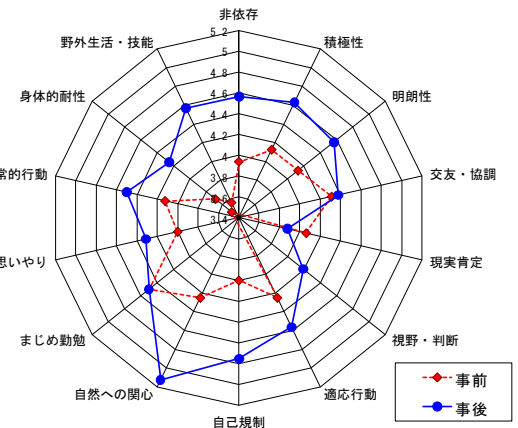
■ 参加者の変容【IKR調査結果】

「視野・判断」では、0.9Pの数値上昇が見られた。中でも下位項目の「先を見通して、自分で計画が立てられる」は、1.0Pと大きな変容が見られた。

また、別の項目では、「自然への関心」が0.9P、「自己規制」が0.7P上昇した。

■ 結果の分析・考察

毎日、自分の行動をふりかえり、今日の成果と明日の課題をしっかりと位置づける時間を設け、同じ活動にくり返し挑戦するプログラム展開を行ったことで「自ら課題点を見つけ」「先を見通して計画を立てる」意識が高まったものと考えられる。



■ 成果

- 子どもたちの感想からも、46kmを歩きとおすという活動が、参加者に大きな達成感をもたらすことがうかがえた。また、思いをとげるひたむきさや負傷した敵を助ける勇気など、先人の思いや考え方に触れさせることができた。
- 参加者一人ひとりの思いをみんなで共有する、ふりかえりの活動を丁寧に行うことで、翌日の活動の質を日々高めていくことができた。
- プログラムを単純化し、同じ活動にくり返し挑戦することで、見通しをもたせ、自発的な成長を促すことができた。

■ 課題・今後の方向性

- 参加者は、事業内容に高い意識を持って臨んでくれた。事業イメージを開催要項等で事前に参加者にしっかりと伝えることは重要である。
- 参加者が少人数であったため、悪天候や傷病者の対応など、スムーズに活動を展開できた。冒険的内容の事業については、適正な募集人数の設定が必要である。
- 今回は歴史を体感する視点のテーマ設定としたが、参加者が定員に達しなかった。今後、様々な視点で歴史を学べるプログラムデザインが考えられると良い。